

アウシュヴィッツから南京へ

市川 明

1. 難民との共生

「ようやくハンブルクも春めいてまいりました。といっても、難民問題やテロで今年の春の風は穏やかではありません」。ハンブルク在住の友人からこんな便りが届いた。

七年ほど前、ニューヨークに滞在したとき、セントラル・パークでも、「自由の女神」像の島に渡るフェリー乗り場付近でも、デモの隊列に出会った。差別撤廃を求めて、移民が抗議行動を起こしているのだ。チャップリンの映画『移民』（1917年）を思い出した。奴隷船の周航のような船旅が終わろうとしている。自由の女神が近づき、船上の移民たちは歓喜の声を上げる。「自由の大地に着いた」（字幕）と。だが解放されたはずの彼らはロープで仕切られ、隔離されてしまう。チャップリンはじめ、みんなの不安と失望の顔……。この姿は百年後の世界と重なり合う。

2015年、シリアをはじめとする紛争地域から海を渡り、ドイツを目指す難民は当初の予想を大きく上回り110万人に上った。連邦首相のアンゲラ・メルケルは人道的観点から積極的に難民を受け入れる姿勢を取ったが、これに反対するPegida（ペギーダ＝西洋のイスラム化に反対する愛国的欧州人）やAfD（アー・エフ・デー＝ドイツのための選択肢）などの右翼組織、極右政党の活動は活発になり、難民・移民への襲撃も起こっている。もっとも大きな課題は難民と住民たちとの共生だが、実現のためには難民の側の言語習得・就業、あるいは宗教的価値観の相違など、さまざまな壁が立ちほだかる。ドイツ市民が難民を同胞として受け入れることができるかが、今問われているのだ。

毎年五月に開かれるベルリン演劇祭では前年度のドイツ語圏の演劇上演から選ばれたトップテンが集結する。昨年五月の演劇祭に僕も参加した。ノーベル賞作家イェリネクがウィーンで起きた亡命申請者による抗議事件を基に書いた新作『庇護に委ねられた者たち』（ハンブルク、タリア劇場）、ユーゴスラビア紛争を描いたヤエル・ローネン作・演出の『コモングラウンド』（ベルリン、マクシム・ゴーリキー劇場）、ブレヒト作、カストルフの潤色・演出で、舞台をベトナム戦争の時代のベトナムに移し変えた『パール』（ミュンヘン、レジデント劇場）をはじめとし、選ばれたほぼすべての演目が戦争や難民などの政治問題をテーマにしていた。

終演後のカーテンコールでは、俳優が「連邦政府の難民政策は間違っている」と非難し、難民庇護のスローガンの下の団結やデモへの参加、募金への協力を訴えかける声明が読み上げられた。上演が終わってからも討論が続けられたりして、ペーター・ヴァイスの『ベトナム討論』（1968年）などが話題を呼んだ、60年代の記録演劇の再燃を思わせた。劇場での熱い雰囲気は僕は「思い出旅日記、ベルリン、猫ちゃんたち」に次のように記してい

る。

「5月8日に猫が、10日に犬が戻ってきた。朝から晩まで仕事で、特に夜は毎日、観劇やアフタートークなどがあり、帰宅は12時半すぎになる。そっと明かりをつけると二匹の猫ちゃんが、私のベッドの布団の上で寝て、待っている。〈疲れているので、夜は一人で寝かせてくれるよう〉（ドイツ語で）言い聞かせたつもりだが、やはりダメだった。劇場で〈難民に優しい国であるべき〉と論議してきたところだ。難民（猫）を力尽くで追い出すことなどできない。寝返りも打てないようなベッドの端で眠ることになる」。——ドイツ人同様、僕も本音と建前の間で揺れ動いているのだ。



写真1（左）：『庇護に委ねられた者たち』上演後の討論（中央は演出のシュテーマン。難民が多く俳優として出演している。）

写真2（右）：難民をめぐる討論の後、深夜に帰宅すると難民（猫）が待っていた。

（東）ベルリンは、僕が1979年から1981年まで留学し、暮らした町だ。着陸したのは壁の向こうの東ベルリン。まだ東ドイツという「社会主義」の国が存在していた。時間だけは有り余るほどあり、お金が何の価値も持たなかったこの国のことを、時おり懐かしく思い出す。競争原理が働かないこの国で、国民はこの上なく善良で、しかも社会体制には総じて批判的だった。日本社会に暮らすわれわれより、彼らの方がはるかに健全に見えたものだ。オスタルジー（東へのノスタルジー）という言葉が流行^{はやり}なのもわかるような気がする。

今から思えば僕はここでまったくの難民だった。日本人は誰一人としていなかったのだから。ここの人たちはみんな僕に親切で、40年近くたった今も友人関係が続いている。それにはさまざまな理由が考えられる。だが間違いなく、民族の差別・排斥が生み出した第二次大戦の悲劇を二度と繰り返してはならないという、大きな教訓をドイツ人は得たのだと思う。ドイツは移民・難民に優しい国なのだ。アウシュヴィッツは彼らの心に深く刻まれている。アウシュヴィッツを訪れてみよう、そのとき強く心に決めた。

2. アウシュヴィッツへ

ベルリンに留学中、ドイツ人の友だちから東欧でもっとも美しい町はプラハ、ブダペスト、クラクフだといわれた。三つの町はチェコ、ハンガリー、ポーランドにそれぞれあり、社会主義国に住む僕はビザも簡単に取れ、すべての都市に出かけた。1980年5月「プラハの春」国際音楽祭に参加した後、鉄道でクラクフに向かった。モルダウ河畔にあるプラハの清楚な美しさに心打たれたが、クラクフもお城のある、緑あふれる町だった。バスで（修学）旅行に来ていたポーランドの中学生の女の子たちが僕のほうをずっと見ていて、「中国人だろうか？ 日本人か？ 聞いてみて」と互いに体を突つきあっているのを見て、「日本人だ」とこちらから答えた。そのとたんにとどろき押し寄せてきて、記念写真を強引に撮らされた。ひょっとしてわが人生でいちばんもてた瞬間だったかもしれない。それほど日本人は珍しかったのだ。

クラクフ滞在中に、そこから60キロほど離れたところにあるアウシュヴィッツ強制収容所跡に一人で出かけた。旅行ガイドブックもない時代で（あったかもしれないがアウシュヴィッツの記述はもろくなかった）、どうやって行ったかははっきり覚えていないが、バスでとにかくたどり着いた。ここを訪れる日本人は1990年の東欧崩壊後は年間200人、現在はぐんと増えて6000人ほどらしい。おそらく僕が訪れた時代は、年間数十人の時代だったろう。とうとうと流れるモルダウ川をチェコ人はヴルタヴァ川と呼ぶ。「モルダウ」は侵略者ドイツ人がつけた名前だからと言う。同じようにアウシュヴィッツもポーランド人は、オシフィエンチムと呼ぶ。一人で行く場合はまずこうしたことから学ばねばならない。

第二次世界大戦中、ヒトラー政権下のドイツが推し進めた人種差別的なホロコースト。1940年に作られたアウシュヴィッツの収容所は、強制労働のための「強制収容所」として、さらには労働不能な女性、子ども、老人や「劣等」民族を絶滅させる「絶滅収容所」として知られている。この収容所で、ユダヤ人、共産主義者（政治犯）、シンティ・ロマ（ジプシー）、同性愛者（ホモ・セクシュアル）など110万人が虐殺された。ここに到着した人たちのうち四人に三人は即刻ガス室に送り込まれて殺されたと言う。

ドイツ統一後、注目され始めた詩人としてのインゲ・ミュラー。彼女の詩には大戦末期の消すことのできないトラウマ（精神的傷）、劇作家であり、夫であったハイナー・ミュラーとの苦悩にあふれた共同作業、60年代の東ドイツの矛盾に満ちた政治状況などが、みごとに凝縮されて現れている。66年にガス自殺をした彼女の詩がよみがえった。

ヨーロッパ

インゲ・ミュラー

男どもが考え出した
ガス室の中には
昔ながらの^{ヒエラルヒー}序列

床に子供たち
女たちはその上
そして一番上に彼ら
強い男ども
.....

ガス室で毒ガスは濃度の関係で下から充満していく。生き長らえようとみな本能的に、必死に上によじ登ろうとする。死体の山に表れた強烈なヒエラルヒー。男たちが起した戦争、男たちが「考え出した」歴史の中にいやおうもなく組み入れられた女性の、冷ややかで虚無的な眼差しがそこにはある。忘却することを許さず、廃墟の中に立ち続ける女性詩人の厳しい目が感じとられる。

僕が到着した日のアウシュヴィッツ強制収容所は、空が抜けるように青かった。その青さに入り口の門のアーチの、**ARBEIT MACHT FREI**（労働は人を自由にする）という文字がくっきりと浮かび上がっていた。ナチスの欺瞞に満ちたプロパガンダだ。**ARBEIT** のBの文字のふくらみが上のほうが大きくて、上下が反転したような奇妙な印象を受けた。

ここから半日間、たった一人の、ながーい見学が始まった。住環境は劣悪そのものだ。囚人たちが収容された建物は、馬小屋のような粗末なバラックである。木の三段ベッドにみんな折り重なるように寝ていた。ベッドの下には汚物を流す溝があり、衛生環境もよくなく、伝染病が蔓延していたらしい。僕がベルリンから最初にワルシャワに行ったとき、冷蔵庫に入ったみたいに寒かった。ベルリンで寒さに慣れていたつもりだが、その比ではない。ここの冬も、氷点下 20 度になることも珍しくない。やせ細り、骨と皮になった囚人たちの写真が、過酷な生活を物語っている。

入所時にガス室送りを免れた囚人は、男女を問わずすべて頭髪を刈り取られる。純血主義を唱えたヒトラーが、アーリアン人の典型としたブロンドの髪。その髪の毛だけが集められた部屋があったり、金歯だけが散乱する部屋もある。ナチスは金目になるものはすべて残しておこうと思ったようだ。このグロテスクな光景が脳裏から離れず、ベルリンに帰っても二、三日眠れなかった。パウル・ツェラン (Paul Celan) の詩「死のフーガ」(Todesfuge) の世界とアウシュヴィッツの収容所の光景が重なり合う。句点（ピリオド、マル）がまったくない詩で、追いかけるように言葉が迫ってくる。

夜明けの黒いミルク僕らはそれを夕方に飲む
僕らはそれを昼に朝に飲む僕らはそれを夜に飲む
僕らは飲むそしてまた飲む
僕らは空中に墓を掘るそこなら寝るのに狭くない
一人の男が家に住むその男は蛇どもと戯れる彼は書く
その男は暗くなるとドイツに手紙を書く君の金色の髪マルガレーテ

彼はそう書くそして家の前に歩み出る星が輝いている

彼は口笛を吹いて自分の獵犬どもを呼び寄せる

彼は口笛を吹いて自分のユダヤ人どもを呼び出す地面に墓を掘らせる

彼は僕らに命令する奏でろさあダンスの曲だ

[……]

この詩の作者、ツェランは 1920 年、旧ルーマニア領、現ウクライナ共和国のチェルノヴィツ（現在のチェルノヴィリ）でユダヤ人の両親のもとに生まれた。第二次世界大戦が勃発すると、両親はナチスの強制収容所に連行され、父は病死（または射殺）、母は殺害されている。ツェランは強制労働収容所で肉体労働に従事した。彼は 44 年にチェルノヴィツに帰還後、収容所などで書いてきた詩をまとめ始める。だが戦争のトラウマに耐え切れず、61 年頃から重い精神病を患い、70 年 4 月にセヌ川で投身自殺している。

「死のフーガ」は 1945 年に成立したが、1952 年になって初めて、詩集『けしと記憶』の中で発表された。この詩の背景が、ナチスの時代のドイツの強制収容所におけるユダヤ人絶滅であることは容易に読み取れる。一日に三百体は焼かれたというユダヤ人の死体。収容所の煙突から一日中上り続ける煙を、詩人は「黒いミルク」という隠喩で表している。語るものたちの逃れられない運命——死がこの詩のテーマであり、「僕ら」は強制収容所にとらえられている囚人たちである。死を間近に控えた人たちの合唱がフーガ（遁走曲）として表される。各連の始めにはライトモチーフ的に、「夜明けの黒いミルク」が繰り返し登場する。これはまっとうできなかった生の隠喩なのかもしれない。ユダヤ人の囚人たちの対極にいるのは、ナチスの将校である。彼は蛇と戯れながら、故郷の恋人にあてて手紙を書く。——甘美さと残酷さの同居。

2015 年 1 月 27 日、アウシュヴィッツ強制収容所がソ連軍に解放されて 70 年が経過した。この日、ナチス・ドイツによる大虐殺を生き延びた 300 人の元囚人（南京大虐殺で言えば幸存者）が参加する解放 70 年の記念式典が収容所跡で行われ、ドイツのテレビ放送は一斉にニュースや特集番組でこの様子を流した。ドイツ連邦議会ではガウク大統領が「アウシュヴィッツなくしてドイツ人のアイデンティティはない」と演説し、戦争の歴史の風化現象に警鐘を鳴らした。



写真3（左）：ZDF（ドイツ国営第二テレビ放送）のアウシュヴィッツ解放70年のニュース

写真4（右）：記念式典に向かうかつての囚人の生存者たち

アウシュヴィッツ強制収容所は、1979年にユネスコ世界遺産に登録された。2007年には、世界遺産登録上の名前を、「アウシュヴィッツ＝ビルケナウードイツ・ナチの強制・絶滅収容所（1940年－1945年）」に変更している。ちなみに南京大虐殺について言えば、ユネスコは2015年10月9日に、「Nanjing Massacre（南京大虐殺）」をめぐる資料を、世界記憶遺産に登録することを決めた。（これに対して日本政府は反対声明を出し、菅官房長官はユネスコへの拠出金の停止や削減を検討する考えを示した。）

3. 南京への道

もう20年近く前のことになるが、広島郊外の町にアウシュヴィッツ博物館を作ろうと言う話があり、アウシュヴィッツから多くの貴重な資料が送られてきたが、段ボール箱に詰められたまま放りっぱなしになっているという記事を読んだ。このことを同僚のドイツ人に話したらたちどころに、「日本にアウシュヴィッツ博物館など要らない。日本に必要なのは南京博物館だ」と言われた。このころから日本の歴史をもっと学ばなければいけない、南京にも行こう、という強い意志が僕の心に芽生えた。

昨年、久しぶりに訪れたミュンヘン。そこには戦後70年を記念し、2015年5月（ドイツの終戦は1945年5月8日）に開館したヒトラー博物館がある。正式名称は「ナチスの記録センター・ミュンヘン——ナチズムの歴史を学び、記憶する場所——」だ。ミュンヘンはナチズム発祥の地と言われ、博物館はナチスの党本部があった「褐色の館」の跡地に建てられた。隣りには元ヒトラー官邸（現ミュンヘン音大）があり、ナチス関係の建物も多い場所だ。建設には大きな論争や反対があった。さらにはどのような展示物をどのような内容で示すのか、専門家の意見も含めて、長い論議が続けられた。保守の町と言われるミュンヘンで、1985年に初めてナチスに関する展示会が行なわれて以来、30年の歳月を経て開館したのだ。行ってみて驚いたのは訪問者の多さと、充実した内容だ。第一次大戦後、小党が乱立し、ナチス政権が誕生するまでの歴史を細かに追った後、ファシズム独裁政治と人種差別の恐怖時代、そして戦後どのようにドイツ（人）が過去と向き合い、過去を克服して、現在に至ったのかを示されている。こうした展示を見て、「自虐史観」だと批判する人など誰もいない。日本も本気で南京博物館の建設を考えたらどうだろうか。



写真5（左）：ナチスの記録センター・ミュンヘン

写真6（右）：展示パネル。暗殺されたミュンヘン革命の指導者アイスナーの葬儀（1919年）

アウシュヴィッツ訪問以降、ドイツの強制収容所跡を僕は一つずつ巡った。ワイマール近郊のブーヘンヴァルト、ベルリン近郊のザクセンハウゼン、ミュンヘン近郊のダッハウなど。ブーヘンヴァルトは僕が担当したNHKテレビのドイツ語講座でも取り上げた。2012年、スリランカへの講演旅行の帰りに、戦時中に「昭南島」と改名されたシンガポールでの日本軍による虐殺の慰霊塔を見たとき、やはり南京に行こうと心に決めた。日本の加害の歴史をしっかりと心に刻むために。

2015年、僕の南京への旅の助走はすでに始まっていた。6月に、日本の映画館で一般公開されていない『ジョン・ラーベ』の自主上映会に参加した。ラーベの残した日記を基に作られたフィクションだ。このように個人の名前をタイトルにした映画は、ヒーローとして称えられるものが大半で、美化されることはあっても、批判的な考察はほとんどないものばかりだ。予想通り、映画にはあまり大きな感動を受けなかったが、南京の安全区やそこで行われた南京安全区国際委員会の活動については大いに興味を覚えた。ぜひその跡地を訪ねてみたいと思った。

南京大虐殺は日中戦争初期に日本軍が行なったといわれる中国兵捕虜ならびに民間人に対する集団殺戮・暴行事件である。1937年12月13日に日本軍は中華民国の首都南京市を占領するが、その直前直後、2ヶ月足らずの間に中国人の敗残兵や捕虜、非武装の一般市民に対して、戦時国際法に違反して虐殺・略奪行為を働いた、というものである。2万件に及ぶ強姦事件も含まれる。藤原彰が岩波ブックレットに記した「極東国際軍事裁判（東京裁判）1948年8月11日の判決」によると、「後日の見積りによれば、日本軍が占領してから最初の六週間に南京とその周辺で殺害された一般人と捕虜の総数は、二十万人以上であったことが示されている」とある。文字通りの「南京大虐殺」なのだが、「南京事件」、「南京アトローシティ」、「南京虐殺」、「南京虐殺事件」などその呼称はさまざま。犠牲者の数の割り出し方により、南京研究者も「大虐殺派」「中間派」「まぼろし派」に分類されたりしている。そもそもシンプルな出来事のはずなのに、複雑な現象なのだ。その根底には日

本がアジアで起こした戦争が「侵略戦争」であったのかどうかという、きわめて本質的な問いかけが潜んでいる。

南京大虐殺やアウシュヴィッツのホロコーストなど、そもそも生き残った人が少なく、証言を得られることが困難な中で、証人たちも年をとり、多くの人が亡くなっている。2000年に阪神ドイツ文学会でアレイダ・アスマン（彼女は自分の名前はオランダ系で、日本で紹介されている「アライダ」ではなく、「アレイダ」だと言っていた）を呼び、僕の司会で講演と討論をしたとき、彼女は著作の『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』（1999）に触れながら、次のように述べた。

二十世紀最大の危機であるホロコーストは、時間の隔たりとともに色あせていくものではなく、ますます重要で身近なものになっている。時代の証人たちの体験がいずれ失われることを考えれば、それを防ぐために彼らの体験的記憶は文化的記憶に移しかえられなければならないからだ。生きた記憶は、メディア媒体に依拠した記憶に道を譲る。そうした際に記憶が歪められたり、矮小化されたり、道具として利用されたりする危険は常に起こる。記憶を正常な形で機能させるためには、公の批判、反省、議論が不可欠である。

文化的な記憶を正しい形で蓄積していくためには、どれだけ多くの生きた証言、体験的記憶が蓄積されているかがまず重要となる。南京の旅へ僕をいざなったのは松岡環だ。松岡は15年以上の歳月にわたって膨大な証言（元日本兵の証言は約250件、生存者の証言は約300件）を集めてきた。その様子は彼女が監督を務めた映画『南京 引き裂かれた記憶』や『太平門 消えた1300人』に収められている。「南京で日本軍が起こした悲惨な出来事を心に強く銘記する」という思いを込めて、松岡は1990年代初頭に市民団体「銘心会南京」を立ち上げた。今回、僕は銘心会南京の研修旅行に参加し、2015年12月12日から12月16日まで南京に滞在した。松岡が現在最も重視するのは、生存者（生存者）の心のケアであり、この旅行でも彼らのお見舞いと聞き取りが含まれている。

12月13日の午前10時から「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」の広場で行われた犠牲者の追悼式典に参加した。2014年以降、これまで記念館主催で行われてきた追悼式は国家追悼式に格上げされた。この日は国家公祭日（国民の祝日）と定められ、南京大虐殺の犠牲者と日本の侵略戦争で犠牲になったすべての人びとへの追悼の日となった。事前に写真を送り、招待のネームプレートを発行された者だけが入場を許される。持ち物も厳重にチェックされ、ものものしい警戒態勢だ。生存者が招待されているのはアウシュヴィッツの記念式典も南京の追悼式典も同じだが、雰囲気はまったく違う。中国の国歌が歌われ、1分間の黙祷。昨年の式典では習近平国家主席が出席したが、今年は全国人民代表大会の李建国常務委員会副委員長が列席し、「時間は永遠に流れるが、歴史は消し去ることはできない」とあいさつした。舞台下手のひな壇に待機した地元の数十名の高校生が平和宣言を読

み上げ、約 30 分で 1 万人が参加する大規模な式典は終わった。夜はろうそくに火をともし、犠牲者を慰霊する、誰もが自由に参加できる小規模な式典も行なわれた。



写真 7 (左): 記念式典を終えて帰る生存者(幸存者)の人たち



写真 8 (右): 利済巷の「慰安所」跡

今回の旅の主要な目的である「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」も訪問した。1985 年 8 月 15 日、日本の教科書問題を契機にこの記念館は設立された。日本軍による大量虐殺が行われた江東門の近くに位置し、多くの死体が埋葬された「万人坑」の跡地でもある。7.4 万平方キロメートルに及ぶ敷地は、集会広場、遺跡、平和公園、展示館の 4 つのエリアに分けられている。この広大な「想起の空間」で、南京大虐殺の悲惨さを表現したさまざまなオブジェを鑑賞、犠牲者の名前や 30 万人という数字が刻まれた壁に、悲しみがこみ上げてきた。南京大虐殺に関する膨大な史料や映像の展示された記念館は、海外から訪れる人も多く、中国語、英語、日本語の 3 言語で説明がされている。時間はあっという間に過ぎていった。

翌日、利済巷の「慰安所」跡を訪れた。建物の涙のデザインに心が痛む。わが国(われわれ)がまずしなければならないのは日本軍国主義が犯した罪への謝罪だろう。行きたいと思っていた金陵大学のキャンパスにある「南京の安全区」も見ることができた。パール・バックがここで活動していたことも初めて知った。中山埠頭に足を伸ばし、1 キロもの川幅があり、とうとうと流れる揚子江を眺める。川を渡ろうとした市民を、日本軍は機関銃と銃剣で次々に殺害した。揚子江河畔で川辺に累々と積まれた死骸を思い起こす。

12 月 15 日、南京から車で 1 時間、郊外の湯山に足を伸ばした。湯山は有数の温泉地で、蒋介石の別荘があったことでも知られている。そこに三人の生存者を訪ねた。籠いっぱい焼き芋を用意して、「紫の芋がおいしいよ」と勧めてくれた藩巧英さん、友情に満ちた微笑を送ってくれた蘇国宝さん、私を見るなり「老朋友」と言い、帰りには熱くハグしてくれた陳広順さん、みな温かで優しい。だが彼らが語る 1937 年/1938 年の日本兵による親族や友人の殺戮は残酷で、あまりにも痛ましい。……



写真9（左）：揚子江の川辺に累々と積まれた死骸



写真10（右）：当時の状況を説明する陳広順さん

加害の象徴としてのアウシュヴィッツ、被害の象徴としての広島・長崎。アウシュヴィッツは加害者であるドイツ人に大きな戦争責任と強い平和への意志を求めた。それに対して私たち日本人は、ともすれば原爆の被害者に留まり、アジアで起こした侵略戦争の歴史を忘れがちだ。私たちが本当に戦争責任を感じ、過去を克服するためには、加害の象徴としての南京を忘れるわけにはいかない。アウシュヴィッツから南京へ、僕はまだ終わることのない長い旅を歩き始めたのかもしれない。